

2017年は、ベトナム（11月29日～12月5日）を訪問しました。

### ベトナム訪問団日程

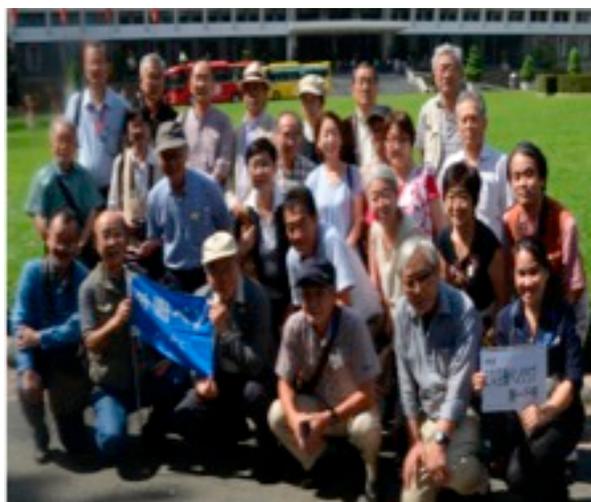
日次	月日	午前	午後	夜間	宿泊
1	11月29日(水)	10:00 成田発 VN311	13:20 ハノイ着 市内視察後 ホテルへ	18:00 ホテル出発 夕食 18:30 大使公邸	フラワーガーデン・ホテル
2	11月30日(木)	9:30-10:30 労働・傷 病兵・社会問題省	14:00-15:00 VGCL(ベト ナム労組総連盟) 16:00-17:00 VCCI(ベト ナム商工会議所)	17:20 水上人形劇 18:30 夕食	フラワーガーデン・ホテル
3	12月1日(金)	8:30~9:30 JETRO 10:30-11:30 ハノイ 工科大学	14:00~15:00 技能実習訓 練センター	19:15 ハノイ発 VN1545 20:30 フェ着 夕食	センチュリー リバーサイド フェ
4	12月2日(土)	フェ世界遺産見学	フェ世界遺産見学	夕食	センチュリー リバーサイド フェ
5	12月3日(日)	6:00 ホテル出発 (朝食弁当) 7:55 フェ発 VN1371 9:25 ホーチミン着	12:00 昼食 14:30 クチトンネル視察 市内視察	ホテルチェックイン後 18:00 夕食	ロイヤル ホテル サイゴン
6	12月4日(月)	10:00-11:00 ベト ナム日本人商工会議 所 (ホテル会議室)	13:30-15:00 エースコック 工場視察 16:30- ベンタン市場	19:00 夕食 00:15 ホーチミン発 VN0015	
7	12月5日(火)	08:00 成田着			

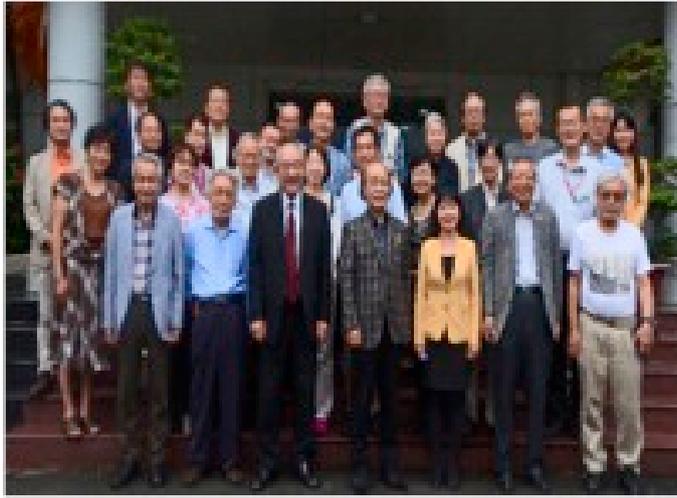
### 社会主義と市場経済の「同居」 ーベトナムで進む「未来の実験」

団長 稲葉 康生

日本労働ペンクラブのベトナム訪団（25人）は、11月29日から12月5日までベトナムを訪れた。親日で、活力にあふれたベトナムのリーダーや若い人たちとの交流を深め、充実した旅となった。

首都ハノイでは梅田邦夫・駐ベトナム大使をはじめ、ハノイ商工会議所、ベトナム労働総同盟、ジェトロハノイ事務所の幹部と会見、政治・経済事情や労使関係の実情などについて取材、意見交換を行った。また、日本に入国する技能実習生の数が中国を抜いて一位になったベトナムで、技能実習生の制度がどう受け止められているのかなどについて現状や課題などを調査する目的で労働・傷病兵・社会省などにも足を運んだ。





また、古都フエでは19世紀から1945年まで13代にわたって栄えたグエン王朝の壮大で優美な王宮などを見学、さらに旧南ベトナムの首都だったホーチミンではかつての大統領官邸、地下に長さ250kmに渡って張り巡らされたクチトンネルの見学や、ホーチミン日本商工会や即席地を製造している「エースコックベトナム」の工場を訪ねた。行く先々で最新情報に触れ、貴重な体験や新しい発見があった。

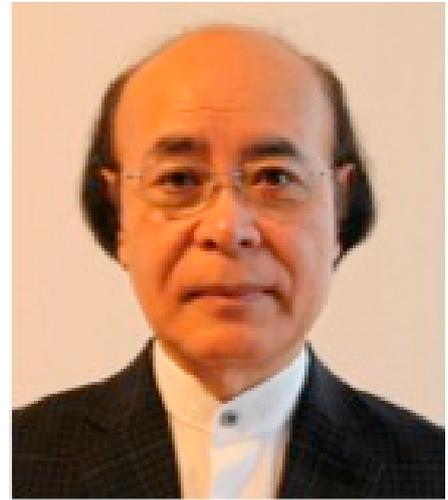
### ▽経済成長で社会は激変

今回で3度目の旅となったベトナムは「政治は社会主義、経済は市場主義」という国となっており、社会主義と資本主義が「同居」し、急激な変貌を遂げていた。それは奇妙でもあり、驚きでもあった。その「同居」が超高速で進む経済発展の原動力になっていた。この同居こそ「未来に向けた新しい政治・経済システムの実験ではないのか」と直感した。この“見立て”が正しいのだろうか。しばらく時間をかけてみていくしかない。

今、市場主義のマネー経済が世界を覆い、所得格差の拡大が社会をゆがめている。資本主義の行き詰まりは明らかで崩壊論まで出ており、将来の設計図が描けず、混迷と閉塞感が漂っている。

今回の訪問の関心は「激動の時代にベトナム経済や暮らしがどう変化していくのか」の一点にあった。社会主義国・ベトナムにマネー資本主義が入った結果、社会はどう変貌するのか。社会主義とグローバル経済は親和性があるのか。こういう視点で滞在中に政府や労組、経済団体などの話を聞き考えた。

社会主義は、資本主義の下での社会的不平等の根源である私有財産制を廃止、制限して生産手段の社会的所有を実現させてきたのだが、ベトナム経済の現況は本来なら社会主義とは相容れない市場主義そのものだった。



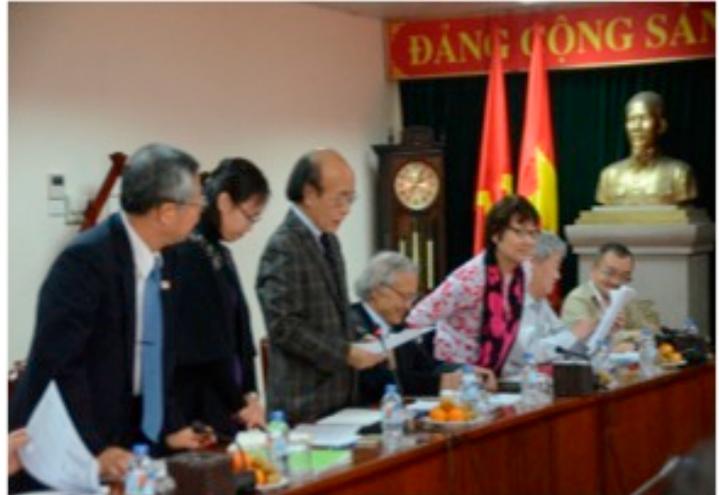
## ▽今後の展開に注目

「マネー」の威力はすざましい。国境や政治体制の違いを乗り越えこの国を新自由主義の非情な市場経済一色に塗り替えてまった。

ベトナムでは 2013 年の法改正で国家賃金審議会が設置され、政労使の 3 者構成で最低賃金を決定している。ハノイ商工会議所の取材では、幹部が「最低賃金の決定では、今後、国の力（影響力）を薄めていきたい」と述べた。使用者は、市場を介した

賃金決定の方向に確実に舵を切っていくのだろう。そうなれば、ますます社会主義との距離は離れていくはずだが、そこまで踏み込んで労使の考えを聞くことはできなかった。

社会主義と市場主義との同居という、「実験場」で、今後どんな展開が待っているのか。それはベトナムの人々の決断となるのだが、カギは「マネー経済」の暴走や矛盾を制御する意思を持って取り組むかどうかだ。社会資本の整備など多くの課題を抱えるベトナムでの「実験」が、世界でポスト資本主義の模索が続く中、新たな社会像のヒント生み出すのかどうかを見続けていきたい。



---

## 若さと活気実感

柏木 勉

ベトナムの平均年齢は 30 歳ぐらい。働く皆さんは若い。オートバイ天国を見てその若さと活気を実感しました。しかしそれは、戦後ずっと 1970 年代後半まで、ベトナム戦争中心に戦いが続き、若者の多くが死んでしまったからです。

この点は日本と同じです。企業の中でマネージャー層が不足とのこと。市場経済へ転換しドイモイ政策の成果が実りだしてからまだ日が浅い、かつ若い人中心である事を考えれば、なるほどと思いました。とにかく平和が一番です。妙なナショナリズムが世界に広まっていますが、下手をするとまた多くの若者が死にます。平和のためには他国の事、他国の人々を知るのが大事。ですから今後も労ペンの海外視察に期待するところ大です。

---

## 未来志向に可能性

長谷川 真一

今回のベトナム訪問は、多くの発見があり、また大変気持ちの良い旅でした。ベトナムの経済の発展と社会の変化、若者の多い国の勢いと熱気、バイクの洪水、親日的で真面目な人々。日本企業の進出もこのところ急速に進んでいます。

変化に対応した人材の養成はベトナムの国家的課題です。技能実習制度への期待も多くの人から聞きました。ベトナムから日本への技能実習生の急増は様々な問題を発生させているようですが、実態の改善に向けた関係者の努力が求められます。

植民地時代やベトナム戦争など苦難の歴史の影響も印象的でしたが、私は未来志向で進むベトナムの大きな可能性を感じました。



---

## ベトナムの底力

保高 陸美

子どものころ、「ベトナム」といえば「戦争」だった。空爆に逃げ惑う人の姿に気がふさいだ。そのベトナムが米軍を撤退させたとの報道に不思議な気がしたものだ。

今回、ベトナム戦争当時、解放戦線の拠点だったクチの地下トンネルに実際に入ってみた。隠し入り口は非常に狭く、胸まですっぽり入るほど深い。足元の横穴は中腰でなければ進めない。真っ暗で閉じ込められる恐怖が襲う。人々は、総距離 250km ものトンネルを手掘りし、ゲリラ戦で近代装備の米軍と戦い続け、勝利したのだ。

枯葉剤のため、戦後 10 年間はまったく草木が生えなかったという一帯を、今は熱帯の草木が覆っている。経済発展を加速させるベトナム。その底力を見た気がした。